

三木露風研究(2) 閑谷時代

家 森 長 治 郎

(国文学研究室)

三木露風が『我が歩める道』（厚生閣書店、昭和3年8月18日刊）で述べている閑谷時代のところを抄出する。

閑谷巖は、和氣清麿を出した備前の国和氣郡にある。二百数十年前に、岡山の藩主、池田新太郎少将光政が建てた学校である。（中略）備前聖人と言はれた西薇山が校長であつた時から数年して、津山の漢学者岡本毅一氏が閑谷の校長となつた。私は其の時に転校したのであつた。（中略）教頭の神戸氏は、物理の教科書も出してゐる人であつた。（中略）其の神戸氏は、私の父とは郷里竜野に於て、竹馬の友であつた。それだから私を連れて閑谷巖へ行つた時も非常に喜んだやうだつた。私は寄宿舎に入つた。（中略）

学校は山間に建つてゐた。それは、昔、学を修めるのに、幽邃な、塵境を離れた処をよしとしたからであらう。位置は播磨と備前との境に近く、山陽線の吉永駅から山中へ、一里余の処にある、又岡山市からは十里程離れてゐる。山間であつて、瞰望する範囲は狭いが、自然の形勝の地である。殊に溪水と樹木とが好かつた。溪水は三方から流れて、それが落ち合ふ処に、高い亭が水中に建てられてあつた。之れは、黄葉亭と言ひ、頼山陽の居た亭である。こゝに頼山陽の書いた額が懸つてゐたさうだが、いつのまにか誰か持つて行つて了つて失はれた。

私は、学業を修むる外は、山と溪と又山中にある幾つもの池の畔に逍遙して詩思を練つた。従つて郷里を離れても、閑谷で、詩歌の作品を多く成した。

学友会から出てゐる『閑谷雑誌』には左の私の小詩を、巻頭に作曲を付けて出した。

小 羊

夕霧深く立ちこめて、	この野辺今や暮れなむとす。
草の舎出でし牧童の	笛の音ゆるう吹き行けば、
頭上げし小羊の	小さき眼輝きつ。

春夏も過ぎて秋になると、山間の空は一層高く明らかになり、山々の黄葉がひとしく錦のやうになつた。溪流の声も一際耳につくやうに思はれる。寒くなりだすと、中国とは言へ、かなり冷える。学生等は、兎狩をなし、山に網を張つて捉へたりした。

午前は五時に起床し、講堂に行つて、遙拝礼をなした。顔を洗ふのは、校庭の寄宿舎の裏にある池であつた。其の池に、冬の寒い朝は氷が張つてゐることがある。それを石を投げけて割つて、洗面するのであつた。夜、寒い時は、寄宿舎の前で焚火をして、それを消して寝た。何分山間の学校であつて、且つ特殊なる徳育中心の教育を昔からして来た由緒を以て知られていたので、天下の名譽と言つて、諸国から来学する者がある為め学生の多くは、寄宿舎にゐた。が、二里又は三里もある処から通学してゐる者もあつた。

私の在学中に、東京の高等師範学校を出た吉田と言ふ歴史の教師が赴任して来た⁽²⁾ 其の人

は文学の趣味の有る人だつたので、私とは殊に親しくした。私の文学上の立場をよく理解して呉れた。学生中には、文芸の趣味のある者もあつたので、それらの人々とも親しくした。

姫路市に、『みかしほ』と言ふ文芸雑誌があり、岡山に『白虹』があり、共に私は同人となつて十里程離れた地から寄稿してゐた。一方に『閑谷雑誌』は号を趁うて善くなつて行つた。其の年も暮れて、翌くる春、私は、閑谷村の名望家の或小莊を借りて住むことになり、寄宿舎から、そこへ引き移つた。其小莊には持ち主の依頼により、故西薇山の書かれた『不言園』と題する額が懸けてあつた。

其の不言園は、村から閑谷川を渡つた小山の中腹にあつて、松籟の音、溪流の音の外は、おとづれ来る春の鳥の声ばかりであつた。私は只一人其の家を借り受けて、食事丈けを谷に下りて橋を渡り、村の家でした。

此様な処から通学してゐるのは、自分ながら学生のやうではない氣もした。時々父が此の莊にやつて来た。父が遙るばる来て私と語ると、純情になるやうであつた。さうして二人で散歩して父が帰る時は、きつと私は小駅迄送つて行くのであつた。

此の不言園にゐる頃には、私の歌と詩の作品が殊に多く成り、それを集めて岡山市から出版した。題して夏姫と言ふ。発行は、明治三十七年の六月下旬である⁹⁾ 其の表紙を有松暁衣が描いた。百合に人を配した初夏の頃の気分の物で四度刷であつた。気持ちのよい三六版の詩歌集が出来たのを私は喜んだのであつた。（下略）

次に閑谷時代の露風の生活と作品について、月を逐うて述べることにする。

三木露風は、明治37年（1904）11月4日付けで、兵庫県立竜野中学校から、岡山県和気郡備前町の私立中学閑谷巖に転学し、翌38年7月1日付けで同校を退学した。県立和気閑谷高等学校保管の学籍簿（和紙印刷）に「三木操。除籍番号、281号。入学、37年11月4日、第2級。退、転学、38年7月1日。理由、家事ノ都合。入学前ノ状況、兵庫県立竜野中学校2学年修業中」とある⁹⁾

閑谷巖に転学して間もなくのころ、閑谷巖の火除け山で露風は泣いていた。旧竜野藩主の家柄に生まれ、露風とは竹馬の友で37年4月より同校に学んでいた脇坂裕之進（明治21年5月10日～昭和42年8月17日）は、寄寓先きの小沢愿一郎先生宅からそれを見かけたので、行って慰めると、露風は「家が恋しい、学校をやめて帰ろうかと思う……」と言った。裕之進は「家に手紙を出してもつき返されるぞ、やめるのなんかよせ」と言ったので、露風は帰宅するのを思いとどまった。それでも二三日は、昼がりの1時か2時ごろ、火除け山で泣いている露風の姿を見かけたという⁹⁾ もっとも、後年露風がなか夫人に語ったところでは、閑谷巖に転学した当座、あまりに淋しいので、裕之進と二人で泣いたということである⁹⁾

明治37年11月15日発行の『文庫』第27巻第4号に、露風の力作「書写山」が掲載せられ好評を博した。この詩は、西国三十三ヶ所の第二十七番札所である名刹書写山円教寺を、麓路・仁王門・本堂・下山の4部に分け、七五調4行10節に詠みこんだ佳作である。37年9月27日付け内海信之（号、泡沫、後、青潮。明治17年8月30日～昭和43年6月14日）宛三木露風のはがきに「小生休日を利し書写の閑境に遊び大に清□〔注、1字不明〕を歌ひ姫路にまはりて帰宅したるが殆ど夜の十二時綿の如くつかれて寝に就き申したるやうの次第」とあるが、この時の清興を詠んで、まだ竜野中学校在籍中に投稿したものと思われる。このはがきの日付けより10日あまり前、9月15日発行の『文庫』第27巻第1号に、同郷の内海泡沫は「雞鳴守」の力作を発表しているが、前年ごろから交通が始まり、のち往来して親交を重ねるようになった5才年少の露風は、同じはが

きに「本月文庫賢兄の詩『雛鶉守』文庫近来の好詩、詩壇巻頭を飾りたる価値は十分のものと失礼ながら存申候」と述べているところから考えて、同郷の先輩泡沫の創作活動にも刺戟され、大いに発奮して作ったものと思われる。

露風は『文庫』第26巻第5号所載和歌短評を、同誌第26巻第6号(明治37年9月1日発行)に寄せているが、11月15日発行の『文庫』第27巻第4号にも、第27巻第2号所載和歌の短評を寄せている。署名は「播磨・露風醉人」とあって、閑谷巖に転校する前の寄稿である。この短評では、董坡・紫煙郎・東村・碧星・白露・紫江・芳水・夕暮の歌を批評している。『文庫』歌壇に第26巻第2号(明治37年5月15日発行)から慧星のように現れた播磨の閨秀歌人前田白露(本名前田ひさの、明治18年生まれ。明治38年2月11日、内海泡沫と結婚)の短歌に対しては次のように激賞している。

月見ませとのみに君を呼止て御袖に涙そとしのばせつ(白露君)

優しくも恋を歌はれしかな、遣る頼なき美しき憂ひを月に托した辺り何という可憐であろう。

思出のそれは水にも影消さんさても破れし恋は何処へ(同君)

濃艶! 紅恨纏綿として尽きず。

悲歌のみをのせよと母は賜はじを今宵弾くべき吾に歌なき(同君)

再三返誦、僕は思はず涙ぐまざるを得なかつた。全幅が悲哀に満ち溢れて居る。若し誰か二百三十幾首の中でどの歌を抜くかと問ふ者があつたら僕は躊躇せずに此歌を押すに違ひない。白露君の歌はいつも狂熱的でしかも哀れである。

因みに、白露女史が明治37年7月15日発行の『文庫』第26巻第4号に発表した短歌3首中の1首「たゆたひ依違のはては別れのけふとなりぬとはに秘めんか君恋ふる歌」に対して、同誌第26巻第5号(37年8月15日発行)の和歌短評欄で、埼玉の杏友が、「真情。何等の虚飾を施さずして惜意を曲尽す。一語悽惋の懐に堪へず。此の人必ず海老茶袴を知らじ。本号抒情詩の庄巻と言ふも過言にあらざるべし」と称賛しているのである。

露風が閑谷巖に転校して来たので、飾磨町玉地生まれで当時岡山の関西中学校の生徒であった有本芳水も、同好の士を迎え得た喜びを、37年11月19日付け内海泡沫宛のはがきに「竜野の三木露風君は当地閑谷中学へ入学仕られ同好の友を得てうれしく候。本月の文庫……書写山……おもしろく、貴兄が縦横の詩才をふりまわして雛鶉を詩化せらるゝはうれしく候」と述べている。有本芳水と露風との往来は、露風が閑谷巖に転校して、岡山から入沢涼月が発行していた『白虹』の同人となってからのことである。露風が涼月や芳水を岡山に訪ね、涼月や芳水もやがて不言園に露風を訪ねるというようにして親交が重ねられたのである⁹⁾

12月。15日発行の『さゝなみ』第7号(発行所兼編輯人、名古屋市杉ノ町64番戸、村田延造。発行所、名古屋市皆戸町、さゝなみ会)に露風は「(マ)残紅曲」と題する七五調4行7節より成る詩を発表している。

懊惱やらんの為なれば	せめての思ひ忘れめと
弱き小胸のとき打つに	韻きし琴の絃なるを。

春は此くてぞ逝くべきに	梨の花散る夕まぐれ
つれなや君の幸薄う	別れ侍りし吾なれば。

何とて君を忘る可き	宵々毎に搔き鳴らす
-----------	-----------

調はいつも変らねど 楽しかるべき春ならず。

寝醒果敢なき春の夜の
冷たき閨に啣ちけむ さまざま浮ぶ御姿に
そも幾度びの恋ごろも。

情焰ゆらん緋牡丹の 葩の一ひらあへなくも
地に萎したる吾なれば 我身の春は秘むべきも。

嗚呼^(つゝ)苦しほしき胸抱き 宵々毎に奏づべき
恋失ひし妻琴の 絃の断れざる其れまでは——。

春は榮へし虹の橋 五月の彩は消えうすれ
果敢なき夢の醒め見れば かくてぞ春は暮れて行くかな。

『文庫』第27巻第3号及第4号所載和歌短評が『文庫』第27巻第5号(明治37年12月15日)に載せられているが、「岡山、露風醉人」が前田白露の作品を批評した部分は、次のようである。

其儘に朽ちんは惜しと友は泣きぬ黒髪五尺二十年の夏(白露君)

凄怨茲に極まる。

なやましと重きまふたは手をのせぬあなや涙の指をもるゝか(白露君)

例によって人を泣かする哀調である。嗚呼君が孤閨になく幸うすき運命は、什箇まで此恨多き女詩人を悩ましむるので有らう? 僕は君が歌を見る毎に常に同情の熱き涙に咽ばざるを得ない。秋風寒し、東栗栖の里、君健在なれや

明治38年(1905)1月。露風は寄宿舎を出て、学校より約1.5km南方にある和気郡伊里村(現在の備前町閑谷)559番地の農家中島種治方に下宿し、中島家の東方600mの、閑谷川沿いの小高い梨畑の中腹にある小荘「不言園」を借りて勉強することになった。不言園は素封家中島幸平(明治元年~大正3年)の所有で、部屋の真中に炬を切った六畳ひと間ではあるが、床の間や押入れもあり、西方には濡縁のある眺望のいゝ瀟洒な建物であった。床の間の上に、西薇山揮毫の扁額「不言園」が懸けられていた。中島幸平の妻小津代(慶応2年~昭和18年)は遠く遊学している露風をかわいがって、よく面倒をみた。当時尋常小学校4年生であった美しい長女慶子(明治27年~昭和42年)も母の言いつけで、露風の袴の綻びを縫ったり、羽織の胸紐のとれたのを縫いつけてやることもあった。此処では寄宿舎にいる時のような上級生の厳しい監視もなく、奔放不羈な彼の性情のままに振舞うことができ、創作活動も一段と活発さを加えた。時々親友脇坂裕之進が訪れ、時には神戸要次郎先生の訪れることもあった。もと竜野藩士であった神戸先生は此処では裕之進に家臣としての礼を尽すのであった。不言園にいたころ、露風は松本という気品のあるかわいい年少の少年と同宿していた。松本少年は誰からもかわいがられ、夏のころには、下宿先の中島種治の妻浅野に団扇で煽いでもらって、その膝を枕に午睡をとることもあった⁹⁾。松本少年について詳しいことはわからないが、明治39年6月1日発行の『新声』第14編第6号掲載「車前草社詩稿」の露風の作9首中の1首「そゞろなる涙の中に君みては母ともまがふなつかしきかな(松本の叔母きみに)」は、松本少年の母を詠んだものであろうか。

露風は岡山県津山町(現在の津山市)堺町九番地仁科堅三が編輯兼発行者であった『暁星』の同人となり、38年1月1日発行の同誌第2巻第1号に短歌を8首発表している⁹⁾。

恋ならず十九の春を帰り来て母のみ膝に抱かれて泣きぬ(その君へ) 〔『低唱』所収〕

うつし世の冷めたき恋を知らんには情けあまりに強かりし君(友へ)

手をとるに小いさき胸のとどろきや春の夜更けし恋物語 〔『低唱』所収〕

世を知らぬかよわき恋を咎めますな姉と呼ばふに声低くかりし

あくまでも人の運命よ冷めたかれ二十黒髪微笑みてあらむ

上記の5首は、総題「翡翠」のもとに同人9名の作(露風以外は各4首)を掲載したその巻頭にある。同誌の他の箇所では、次の3首が掲げられている。

我袖に眉を覆ひて泣く妹の髪のかづれを美しと見ぬ 〔『低唱』所収〕

かくて我ちいさき魂は迷ひぬる破ぶれし恋を夢はいづこへ

眉をあげて妻はもたじと説きし三年むつびの今日の君にやはあらぬ

『文庫』第27巻第6号(1月1日発行)誌上にも次の4首が第1席(渡辺光風選)に掲載せられている。

情ある君の手とりてしばらくは秋の別れに泣かしめ給へ 〔『低唱』所収〕

母恋うて夕べ戸に靠る若き子が愁ひの眉よ秋をえ堪へぬ 〔『夏姫』所収〕

月おぼろ春の二条の夜はふけてくはし歌姫さゞめき過ぐる 〔『低唱』所収〕

紅欄に夕べ愁へて倚る袖をにくや花打つわれに歌なき 〔『低唱』『夏姫』所収〕

雑誌に発表した作品を、『低唱』或は『夏姫』に収めるに当って、露風は字句の推敲をしている場合が多い。例えば第4首目の歌は次のように推敲されている。

紅欄おほしほに夕べ愁へてよ靠る袖を憎や花うつ吾れに詩なき 〔『低唱』〕

勾欄おほしほ ゆふべに夕愁へてよ凭る袖を憎くや花うつ吾れに歌なき 〔『夏姫』〕

2月。露風は入沢涼月が岡山市花畑30番地の自宅に血汐社を設け、そこから編集発行していた『白虹』の同人となり、2月15日発行の第1巻第3号に「日向葵」と題して短歌7首を発表している。7首のうち4首は『低唱』や『夏姫』に収録された。

春の王の恋を称へし日向葵や我門遂におどろとなりぬ 〔『低唱』所収〕

あはたゞし人を嫉みて狂ふ子の吾れにもあらず妻は女とらじ

ひぐるまの恋を驕りて寮れうのふたりかくてこの春を長しと思ひぬ

我道の百合と変じて黒き恋白き少女の悩みに見たり 〔『夏姫』所収〕

日向葵に恋に酔ふ子のふたり載せて星の百合咲く其国めぐれ 〔『夏姫』所収〕

声あげて呼べば木霊こだまとかへり来ぬあゝ天地に我領なきや 〔『低唱』『夏姫』所収〕

恋なくて我わがあめつちは得堪えんや世の寂寥さびしさに吾得堪えんや

「声あげて云々」の歌は『低唱』では次のような詞書が付されている。

東京に居ます母を呼んでも何の返事もなし、哀れ母は今いかにしてけむ、思へば哀れなりけり
露風が毛筆で認め、「貧しき詩人」と自署した詩歌集『低唱』は、このころにまとめられたものであろうか。『低唱』には短歌60首(うち10首は『夏姫』に再録)・俳句16句・詩1篇が収められ、脇坂裕之進が淡彩を施した口絵2葉を描いている。短歌60首中、筆者が初出誌を調査してわかったのは11首である。『文庫』明治37年10月15日号に3首、38年1月1日号に3首、『曉星』38年1月1日号に3首、『白虹』38年2月15日号に2首である。「文芸倶楽部に花雨として出す」と注が付されている俳句「束髪にいばらを挿しけり夏姿」や、「夕空に希望の星を仰ぐとや星は愁ひにまたたくものを」の短歌は、共に露風高等小学校時代の作で、「夕空に云々」の短歌は、「神戸又新日報」の一等当選作であるという⁹⁾『低唱』には、露風が俳句に力を注いでいた高

等小学校時代の作も含まれているが、短歌の内容や初出誌から考えると、竜野中学を退学して閑谷巖に転学する前後から38年2月ごろまでの作が多く収められているようである。⁽¹⁰⁾

3月。15日発行の『文庫』第28巻第4号に短歌4首(渡辺光風選)が掲載せられた。

狂ほしき春の我が歌世を拗ねて偽る恋に人罵りぬ
我が胸の焔の疾風二十年の黒髪捲きて恋をうらなへ
百合の輪の地に落ちたる響して二十万年世の恋冷えぬ
嫉ましき琴のしらべに袖よせて春はかごとの美しき宵

4月。5日発行の『白虹』第1巻第4号に、露風は短歌を9首(「小鼓」の欄に6首、「紅梅襲」の欄に3首)を発表している。「小鼓」欄6首中の一「百合の輪の云々」は前月『文庫』に発表した作と同一である。この月の初めごろ、姫路の鷺城新聞主筆高浜天我(本名二郎、別号蘇江。明治17年9月～昭和41年12月)が閑谷巖を受験する従弟を伴って不言園に露風を訪ね、二三泊した。露風は鷺城新聞日曜文壇の投稿者であり、竜野中学生のころから鷺城新聞社を訪れているので、高浜天我とは懇意であった。天我の思い出によれば、⁽¹¹⁾「泊ったのは普通の農家であり、露風の他に2人ほど下宿していた」そうであるから、それは中島種治方であったと思われる。不言園は六畳ひと間である。天我の従弟は試験を受けることなく、面接だけで入学を許可された。天我はそれから岡山に遊び、鷺城新聞の投稿者であった有本芳水や、『白虹』を編集し発行していた入沢涼月と相識した。天我はすでに『白虹』第1巻第2号(明治37年12月25日発行)に「我等の国歌」という評論を寄せていた。⁽¹²⁾

5月。5日発行の『白虹』第1巻第5号に、露風は七五調6行5節より成る詩「桜月夜」を寄せている。わかかわしく流麗な調べの作品で『夏姫』に収録されている。

桜月夜に笠脱げば 風流を真似る子ならねど	花はらはらと袖に散る けふを明日への旅ごろも	被羅かむりて笛吹いて 只憧憬れて辿りけり
追憶多き故郷の あゝ新しき恋湧かば	過ぎたる夢を追はんとて 青春きこゝろよ得堪へんや	此子に詩はあらずとも はては覆ひて泣かるゝに
霊火にそむく情熱の 面映ゆかりし春の夜の	よしや妬みは多くとも 別れに清眸をあふれたる	美しく恋を咎めざれ 涙灑ぎし君思ふ
せめて二人に酔ふ子等に 腕よあまり弱くも	花よ吹雪くを惜まざれ (有情か花の一ひらに	相思若うて君を捲く うつくし恋を載せて行け)
ひとり行くにも懐がれて 斜に月を透すれば	狂ふ心臓に同じ道 雲漂ひて影しづか	花を仰ぐる旅の笠 桜月夜は更けて行くかな

15日発行の『文庫』第29巻第1号に短歌4首(渡辺光風選)が掲載せられた。

しかすがに弱き御魂に消えぬべし流転三とせは恋あざざりき
心して水二百里は行き給へ春を別れのさても淋しき

〔『夏姫』所収〕

弱ければもとより運命薄ければ二十、情を知らずに過ぎぬ
 美しき姫護る島を南に恋ふるがごとに花潮寄する
 〔『夏姫』所収〕

6月。露風は内海泡沫に6月1日付けの書簡で、詩歌集『夏姫』を出版するについてその序文を乞うている。書簡は次のようである。

肅啓 緑蔭に涼を趁ふよき頃と相成申候処大兄の詩囊更に量を加ふるものあらんとおん羨ましさに堪えず候。楮、既に入沢涼月君より御依頼下されたる事と存候が小生此度び嗚呼がましき事ながら閑谷に入りてより七ヶ月間の中、詩情を動して低い乍らも歌ひたる長詩短詩多くも候はねど何も記念として取まとめ置きたく、詞友に頒つだけ刊行いたしたく思ひつき申候に就いては井上桐雲入沢涼月山野辺浮草高浜天我諸兄も御助力下さる由にて、岡山奥田金正堂の快諾をも得て来月下旬「夏姫」と題して刊行の手續に相成申候。もとより鈍才文壇に旅立たん発途と申すには之れなく、さる恐ろしき野心の決して存するには候はず、閑谷を去るの記念として残し置きたきが為のものにて、附録として「閑谷の巻」といふを附したき心組に居り申候、野生或は来学期より上京仕るべきやもはかられず、さては此事を思ひ着きたる次第。しばらくなづみたる閑谷の幽趣捨て難く存ぜられての事に御座候。之れに就いては涼月君とも色々相談の上、せめて先輩諸兄の序文を得て此可憐なる主意より出でたる詩集を飾り申したくと存じ洵に失礼乍ら書信を以つて大兄に御依頼仕る次第に御座候。(中略)

追伸 序文洵に勝手がましく候へ共本月十五日頃迄に御願ひいたしたく候。 六月一日

三木操 内海泡沫様

この手紙によれば、すでに五月には『夏姫』刊行の計画が立てられていたことや、閑谷齋を退学して九月には上京する予定であったことがわかる。

『わが歩める道』には『夏姫』出版に関して次のように記されている。

私が、備前閑谷川の近くに、茶室めいた不言園の一室を借り受けて住んでゐたとき、文学の好きな吉田教諭が来て、殆ど友達と同じ様な態度で話した。是非『夏姫』一卷を早く公にするようにと勧めた。私の第一詩歌集『夏姫』(明治38年出版)は、此の不言園の家で成ったものである。

しかし、脇坂裕之進の語るところでは、『夏姫』出版の計画を露風が教頭の神戸要次郎先生に相談したところ、大喝一声、「学業を疎かにして何を言うか！」とひどく叱られ、当座は露風も大変意気消沈していたという⁽⁴⁹⁾三木制や三木節次郎から露風の一身を托され、露風の身元保証人となっていた神戸要次郎は、学業を余所にして創作に耽り、奔放な生活を送る露風のことは、ずいぶん心を痛めたことと思われる。

神戸要次郎について、竜野市如来寺の墓碑銘は次のように伝えている。(注、原文は漢文であるが書き下し文にする)

神戸要次郎墓。

君、名ハ要次郎、田付寅三郎第二子ニシテ神戸正温養フ所ナリ。君、性順良、寡言ニシテ物ト争ハズ。幼ニシテ藩齋ニ入り、漢学ヲ修メ、後、大津師範学校ニ学ビ、尋テ第三高等学校助教授トナリ、岡山医学部ニ従事スルコト数年、遂ニ選バレテ閑谷学校教授トナリ、専ラ後進ヲ誘拔ス。校規大ニ振ヒ宿弊漸ク革マル。隅マ病ニ罹リ明治四十年二月十五日歿ス。享年五十二。妻ハ種村氏、男正信、業未ダ成ラズシテ死ス。長女、国枝芳男ニ適ギ、次ハ木村猪三郎ニ適ギ、季ハ山家安太郎ニ適グ。君ノ歿スルヤ、闔校悼惜シテ措カズ、生徒其ノ柩ヲ護

持シテ之ヲ葬ル。其人心ヲ感□(注、一字不明)セシムルコト此ノ如シ。嗚呼悲シイカナ。

大正二年二月、本間貞観撰書。木村猪三郎建。

『閑谷読本』(昭和6年10月19日、岡山県閑谷中学校発行)⁽⁴⁴⁾に谷馨(岡山県御津郡建部村の人、明治38年より40年まで閑谷馨教諭であった)の文「閑谷馨」が『朝鮮総督府発行改修高等国語読本巻三』から転載せられている。神戸要次郎に関する部分は、次のようである。

神戸氏は元閑谷馨の教師をしてゐた方で、在職僅かに4年で、明治40年2月なくなられました。屍を火葬場に送つて、荼毘に附する為、村民を傭つて置いたところが、生徒は、靈柩を担がして呉れと懇請しました。学校では既に村民と約束したことでありますから、其の儀に及ばないと断つたが、彼等は、是非にと哀願して止みません。傭賃は、村民に取らせて可いから、何卒我々をして、恩師の靈柩を荷ふ光栄を得させて呉れといふのであります。学校では、深く其の情誼の濃やかなるに感じ、とうとう彼等の希望を容れることにしました。多数の生徒は大喜で、柩の裝飾やら、何やかやと、葬送の支度をして、20名の者は、朔風凜烈たるにも拘らず、素足に草鞋がけの扮装で、柩を荷ひ、その他の者は、柩の前後を守つて、1里余りの羊腸たる山路をたどりたどつて、火葬場にいつたのであります。二百の生徒は、北邸一片の煙と消え去る旧師の遺骸に対して、歔歔流涕、万斛の涙を濺いだのであります。其の後、遺骨の分与を請うて葬つたのが、即ち薇山先生の墓側に在る、一基の墓標であります。墓標は、薇山先生の墓のやうに、大きくは無いが、兎に角、二百の子弟の至情の迸出であります。哀慕の結晶であります。中にも某生の如きは、悲哀の極、葬送の前日、剃髪して、其の柩前に終日拝伏し、泣飲嗚咽、読経して立ち去らなかつたのであります。其の心のしほらしさ、いちらしさ、一人として、落涙しない者はありませんでした。

昭和30年11月に帰郷した露風が、三木家の菩提寺である如来寺を訪れた時、神戸要次郎の墓標の前で、ふと歩みをとどめ、じっと佇んだまゝ往時を追懐して、なかなか立ち去ろうとしなかつたという⁽⁴⁵⁾

『閑谷読本』に露風の短歌が1首収められている。

閑谷馨の昔を思ひ出でて 講義きく講堂のしづかなる空気に鳴きし雉子の声かな

露風は、高浜天我が編集し、6月5日に創刊号を出した文芸雑誌『みかしほ』(姫路市光源寺前三日潮社発行)の同人となり、同誌に七五調6行6節(第3節だけ破調)の詩「黄金舞」を寄せている。この作品も『夏姫』に収録された。なお『みかしほ』は一号雑誌で終わった。

6月10日発行の『白虹』第2巻第1号に、露風は、七五調5行7節より成る「黒髪」を寄せている。次に掲げる。

新月 <small>じやう</small> の情ある夕	ちる花の風に漂ふ	離れたる一室のうちに
夢追ふて酔ひたる如く	若き子のふたりは語る	
黒髪 <small>には</small> の韻 <small>ひ</small> にこぼれて	艶なりやうつむく人の	はかなる <small>(つ)</small> すぐせを語る
追懐 <small>おもひ</small> の傷み堪えずで	乾きたる唇 <small>くち</small> みだれ勝ち	
幸なきは女といふ名	あはれめと愁 <small>ひ</small> に曇る	やさし眉はげしく動き
熱 <small>ま</small> き露清眸 <small>ま</small> をあふれて	君はしもさめざめ泣きぬ	
美しき妬み <small>を</small> 知らぬ	同情 <small>おも</small> ふ子は漫ろ <small>に</small> なりて	ふたがりし胸くるしきに

多からぬ慰藉 ^{たぐきめ こと} の言	情なき子とな咎めそ	
恋ひ泣きて死ぬによろしき	患は、肺なれかしと	あゝ君は恋失ひて
狂ほしく煩悶 ^{もだへ} に悩む	そのこゝろ吾れは泣きしか	
別れ来てさすらふ身には	雲見れば只悲しくて	恋ならぬ君を思ふに
うかうかと人笑はれて	羞かしくおもひもせしか	
弱き身の病ひを得ぬと	君聞かば其夜の語り	同情 ^{おもは} れし君はた泣かむ
さはれ只いつはる愛の	懐疑 ^{うたがひ} の此世解かむや	

『白虹』第2巻第1号の編集担任は入沢涼月・三木露風・井上桐雲の三名となっているが、三木露風は名を列ねただけで、実質的に編集のすべてを入沢涼月がやっていたらしい。このことに関して、涼月の、内海信之宛書簡(38年6月24日付け)の一節に

終に一言す、そは三木露風君の事にて候。小生は兄には決して疑はれざるも改めて余の態度心情を表白致し置き候。小生同君に対して昨今少からず多大の哀しみを抱き、子が文士としての、否学生としての墮落を憤慨せるもの、畏敬して遠ざかるの主義を取り申し居り候。子が白虹の編輯者となるほんの名のみにて依然として小生独力に御座候。こは詩集「夏姫」なんかの事にて依頼を受けをるもの既にこれ等は心あるものは承知せる事に候。兎に角露風君と余と同一視せられては大いに小生迷わくに候間一言余が心情を忌憚なく申上置候。

以上の文句は最も秘密なる事こは親愛なる兄内海信之君のみに呈せしもの、断じて他言深く御断りに候。

兎角、小生は小生の心情を吐露するものは兄の外御風君と東村君の三名のみに候。(圈点筆者)

とある。「学生としての墮落を憤慨」したのは、閑谷で結ばれた美しい乙女太田茂代子との激しい恋愛のために、露風の学生々活がひどく乱れていたことを意味するものであろうか⁽⁹⁾

露風はこの月に、前田林外が相馬御風と共に編集し発行していた東京純文社の『白百合』の社友となったことが、同誌第2巻第9号(38年7月1日発行)の「社告」に、「客月中入社清盟に加はりし社友は……三木露風(岡山県、入沢涼月氏紹介)」と報ぜられていることからわかるのである。そうして同誌第2巻第10号(38年8月1日発行)の「純文社詩稿」欄に、深刻な恋愛を詠んだ短歌4首が、「三木露風(岡山)」の署名で掲載せられている。

夜にひるにうらみに乱す黒髪よ焔となりて君が胸捲け
 我が肩をすべりて黒きくちなわはあゝ今君が乳房をまきぬ
 ふたりして死なむもよしや島かげにくろき陰ひき月落ちかゝる
 さそはれて来しや述ひ路まどひては梅の影見ずたゞ闇さぐる

7月。露風は7月1日付けで閑谷饗を退学し、「吉備国閑谷を去る紀念の集」として詩歌集『夏姫』を、7月15日に入沢涼月の主宰する「血汐社」(岡山市花畑町30番地)から出版した。前述のごとく、露風は6月1日付けの書簡で内海泡沫に『夏姫』の序文を乞うているが、7月12日付けの同氏宛書簡では、『夏姫』ができたので謹呈すること、露風自身が校正の任に当らなかつたので誤植と脱字の多いのには弱っていること等を述べている。同書簡の露風の住所は「備前和氣郡閑谷559、中島方」となっていて、7月1日付けで退学はしたものの、なお暫く閑谷に留

っていたようである。

そのころに作って投稿したと思われる短歌が、前述の『白百合』誌上の4首以外に、8月5日発行の『白虹』第2巻第2号に7首と、8月15日発行の『文庫』第29巻第4号に8首(尾上柴舟選、第3席)が掲げられている。『白虹』の7首には「疎影」という題が付されている。

興添はず雨に更けたる詩の室や現を夢と影追ふものか

薄月の花散る夕別れむのみ胸弱しと泣かせまつりし

あるときは悲しと泣きし人や人見ながら恋をうばひて行くか 〔『夏姫』所収〕

其ひとつ琴柱たをれぬ狂るほしく狂ほし調へ奏でゝあらむ

流れよる藻の花かざし潮呼びて海の大戸によらんのねがひ 〔『夏姫』所収〕

〔『夏姫』では「流れよる藻の花かざし海姫が若き侍女と呼ばれむねがひ」となっている〕

我れと我が罪に心は戦きて聖堂の闇にいのり捧ぐる

まろびつゝ泣きつゝ辿る運命の世黒魔の蝶に追はれてぞ行く 〔『夏姫』所収〕

〔『夏姫』では「まろびつゝ泣きつゝ行かむ運命の世神の救ひは死してよりのち」となっている〕

『文庫』第3席に掲げられた8首は次のようである。署名は「三木露風(岡山)」とある。

駒立つれば染分手綱ゆらゆらに手元吹かるゝ青あらしかな

まろび寝の夢を吹きよる草の風青きがのみの吉備野はひろき

朝月の小橋わたりて霽の中にまかれて行きぬ暁人は

またしても振りかへらるゝ別路に臉おほひて往く子あはれめ

熱き恋を地に見るごとかくやくと夏の輦駕大空きしる

磬も鳴らず青葉にうとき奥の院とひよる人に鳴くほととぎす

うつゝなうとぼそに寄りて山吹に糸ひくやうの春の雨見る

同じ名の君は都の秀才たれ吾れや寵なき吉備野の小草(浅山露風君へかへし)

『夏姫』出版について、いろいろと尽力した入沢涼月も、美しい詩歌集のできあがったことは、さすがにうれしく思ったらしく、内海信之宛7月8日付けのはがきに「三木君の『夏姫』本月10日発刊申し見事なるものに候」と述べ、同月17日付けの手紙では、「夏姫は編集よりすべての事小生が独りでやつたるもの、露風子も余の情の厚きには敬服致し居る様子にて、多大の感謝の意を表し居り候」と述べている。

『夏姫』には、清水橋村・内海泡沫・高浜天我・井上桐雲・川路柳虹・有本芳水・氷室紫虹・楓葉及び入沢涼月の序文と、露風の自序があって、次に短歌113首と詩10篇が収められ、付録として入沢涼月の短歌27首が収録されている。露風の短歌は、「夢野」(22首)「吉備路」(18首)「なさけ」(23首)「花潮」(17首)「寂寥」(17首)及び「舞ぎぬ」(16首)という題名のもとにまとめられている。詩10篇の題名は「星落つしきり」「若き梨の実」「白嘲」「黄金舞」「暮愁」「書写山」「桜月夜」「春の夜」「山の歌」及び「森の朝」である。

『夏姫』の作品で、その初出雑誌を確かめえたものは、短歌12首と詩3篇である。その他、私信(38年1月11日付け前田白露宛はがき)に短歌が1首ある。発表年月順に列べると、次のようになる。

あゝ君が情黒髪長うして捲くによるしき我が恋の胸

文庫37・10・15

百合にねし其夜ひと夜の夢さめてちいさき星の恋知り得たり

” ”

詩「書写山」

文庫37・11・15

母恋うて夕べ戸に靠る若き子が愁ひの眉よ秋をえ堪へぬ	文庫38・1・1
紅欄に夕べ愁へて倚る袖をにくや花打つわれに歌なき	” ”
さびしみの雲を仰ぐに得堪ぬ子只うつむきて夕野を辿る	私信38・1・11
我道の百合と変じて黒き恋白き少女の悩みに見たり	白虹38・2・15
日向葵に恋に酔ふ子のふたり載せて星の百合咲く其国めぐれ	” ”
声あげて呼べば木霊とかへり来ぬあゝ天地に我領なきや	” ”
詩「桜月夜」	白虹38・5・5
心して水二百里は行き給へ春を別れのさても淋しき	文庫38・5・15
美しき姫護る鳥を南に恋ふるがごとくに花潮寄する	” ”
詩「黄金舞」	みかしほ38・6・5
あるときは悲しと泣きし人や人見ながら恋をうばひて行くか	白虹38・8・5
流れよる藻の花かざし潮呼びて海の大戸によらんのねがひ	” ”
まるびつゝ泣きつゝ辿る運命の世黒魔の蝶に追はれてぞ行く	” ”

上掲の作品で最も早期の37年10月15日発行の『文庫』誌上の短歌3首は、11月15日発行の同誌上の「書写山」と共に、竜野中学に在籍中の作品である。最も新しい作品は、『夏姫』刊行後の、8月5日発行の『白虹』誌上の短歌3首であるが、これは『夏姫』刊行後、更に推敲して『白虹』に掲げたものとも考えられる。いずれにしても、これらのことから考えられることは、『夏姫』所収作品には、竜野中学生のころの自信作も、その数は少ないけれども収録されていることと、大部分は閑谷巒に転学してからの作品、それも不言園に移ってからの作品が多いということである。

7月1日付けで閑谷巒を退学した露風は、暫く閑谷に留っていたが、有本芳水を頼って8月20日に上京している。内海信之宛8月29日付けの絵はがきの文面に、「20日上京仕り候。先夜菫月一露の宅にて松原至文と面晤、正富汪洋の夏廬千部直ちに売切れ候。南江涼月たづね来りしや、今夜芳水と本郷座に女夫波を見に参るべく候。」とある。住所は「東京鞆町区一番町一六、野中清方」となっている。

詩人として立ちたいという露風の切なる願いにも、父や祖父は反対だったようである。「淡い夢」(『女子文壇』明治42年7月1日発行)の一文⁽⁴⁷⁾に、上京当初の思い出が描かれている。

私が初めて東京へ来たのは三十八年の八月で、十七才のロマンチックな少年であつた。何でも一図に「詩をやりたい」——と云ふのが目的で、学校の事などはろくろく考へてもおらなかつた。その頃の事を思ふと未だに冷汗が流れる。「貴様が成業しやうとは俺は少しも思つてはおらぬ」と云つて父は玄関迄送つて呉れた。

新橋へ着いたのは日は忘れたが非常に暑い午後のもので、この光の動く炎天の下に東京が横はつてゐるのを見ると無性に胸がワクワクして急に嬉しさと幽かな不安とがこみ上げて来た。しかし此時若し同郷の有本君がゐてくれなかつたなら私はどうしていゝか分らなかつたに違ひない。有本(芳水)君は此時私よりは一年も早く上京してゐたので、もうスツカリ東京化してゐたのだ。それで兎も角当分のうち同君と一緒に居る事にして私は麴町一番町の今でもおぼえてゐる。夏菊の咲いた野中と云ふ後家さんの家に寄寓をした。その家は今は如何なつたかといふそのまゝになつて訪ねもしないが、隣は湯屋になつてゐて、毎晩遅くなると夜終ひをする三助の眠さうな唄とカタンカタンといふ湯桶のひゞきが哀れに聞えた。私たち

はその六畳の間で盛んに詩や歌を作つて互に批評をし合つた。実際有本君の方がいつも味のあるものを書いてゐた。たゞどちらも幼稚であつたことは無論いふまでもない。

その頃本郷座で高田や藤沢が「女夫波」か何かをやつてゐた。二三日もつゞけて二人はそれを見に行つたと記憶する。電車に乗つて歸つて来る時、私は余程疲れて無言でゐたがそれでも心の中では都会と云ふものゝ愉快なこと、花やかで美しいこと、文明といふものがどんなに我々を魅するか!といふやうなことをわけもなく只しみじみと感じてゐた。

都会に於ける第一印象と云へば即ちこんなことでもあつたらうか、とりとまりのない淡い夢見るやうな感じ、その頃のロマンチックな少年の瞳には何を見ても、夫がもうたゞ花やかな幸福であつたに違ひない。

しかし間もなく最後に編入した水道橋側の商業学校を四度目に出された時、親からして厳しい勸気を受け、哀れな私は忽ち悲惨な境涯に墜落した。勿論、都会に対してもさまざまの違つた感想を持つやうになつた。(圈点筆者)

17才の少年露風の詩歌集『夏姫』の書評が、9月1日発行の『国詩』第1巻第6号と、9月15日発行の『文庫』第29巻第5号とに掲載せられた。『国詩』の書評は並木薫雨という署名の執筆で、次のようである。

『夏姫』は岡山の少年詩人、三木露風子の処女作詩集なり。今一本を寄せて吾人の批評を求めらる、吾人詩を觀るの明無けれども、一言無くして休むは著者に対するの礼にあらず、下に少しく吾人の一家言を加ふとせん。

先づ体裁より言へば、瀟洒にして奇麗なり、新体詩人有松曉衣君はまた好個の画家なりけり。

讀過面白しと懐ひたるものを掲げん。

夢野ゆく水をし追ふな若き君花は流れて香にまどはれむ
 湯の宿に醒めたる夢を飾るとて若きひとりが花もてまゐる
 浪華よき花の入江に舟寄せて十二の夏は母恋ひたりき
 吾れを中に黄金の雲の捲き寄るとおぼえて醒めし昼の夢かな
 海姫の恋のなごみのあさあけを大扉ゆすりてよるや青潮
 朱紐の鼓かゝへて京の子が二条を急ぐさくら月夜や
 朝あけの新らし清香もたらして夢おとづれよ紹蚊帳の人に
 渡舟待つ小笠のひとり眉若し糸ひくやうの細雨にして
 美しくしき姫護る島はみんなみに恋ふるが如に花潮寄する
 天を恋ふる海の大むね高鳴りにあゝ花潮のとよみ来るかな
 青風にさやき涼しき森蔭や人の集よむまるび寐もよし

など佳作少なからず、優に近代の幽致を宿して清韻掬すべきものあり、この詩人恐らくは短歌に於て成功せむ

長詩に致りては未だ此詩人の特長を發見し得べからず、されどこの若き詩人が自然に対する熱き憧憬こそ、将来成功せしむる素因なれ、但し単に熱烈の情ありとするも觀察の邃きものあるにあらずんば、遂に單調平板に陥り、個人の詩的生命を失ふに至るべし、『夏姫』の著者は年少なりと云へば、今日多大の満足を買はんは、頗る理に失したる如くなれども、吾人この詩人に望對する所多きが故に一言す、作者夫れ之を力めよ。

又言ふ、昨年より詩海の高潮に乗して世に現はれし少年詩人頗る多々、菫月一露の『鬼百合』、野口雨情の『枯草』、石川啄木の『あこがれ』と合せて、この『夏姫』四篇目なるが、『鬼百合』には稚気あり、『枯草』には俗気あり、『あこがれ』には衒気あり、共に吾人の詩的慾望を充す能はざりしが、独り『夏姫』に於てこの心理的欠陥の幾分を補ひたるは、喜びに堪へざる所なりとす。(薫雨生)

並木薫雨の『夏姫』評は、「この詩人恐らくは短歌に於て成功せむ」と述べて、短歌の方に重点を置き、歌人としての将来に望みを託している。詩については、「長詩に至りては未だ此詩人の特長を発見し得べからず、されどこの若き詩人が自然に対する熱き憧憬こそ、将来成功せしむる素因なれ」と述べて、自然に対する熱い憧憬に注目している。

『文庫』誌上の『夏姫』評は、「汪洋と露風の近業」という題のもとに、氷簾という署名で松原至文が執筆している⁽⁸⁾『夏姫』の部分は次のようである。

露風は年齒極めて少なくして、才氣溢塗するの能ある好才人。その『夏姫』の如き、彼らの歌を見れば最も精選せられたる作物のみを摘載せるものの如し。唯だわが渠の歌にとらざるところは、その歌風の一家特得の露風型なきところなり。

森の精の息吹に霧は立ちこめて青葉草花みなよみがへる
巧は即ち巧なりと雖もその柴舟血の混じ、柴舟臭の発するものあるを奈何。

君待つと只あくがれて立ち出でし栗の花散る宵月夜かな
われ『みだれ髪』にこれに似たる歌を看出さん事、極めて容易の業に属す。されど翻って思ふ。世の青年歌人にして、晶子血、柴舟血、薫園血を混へずして、純精自家の血脈のみを以て三十一文字をつくるもの果して幾人かある。我は露風君が年少にして少なくもこの他家の血を混へながら、猶且つ濫りにその素肌を露はさずして、よく観装を整へうる才を多とせざるを得ず。太だつつましき彫琢を露風君に於て見る。

温泉を出でて七里は駕籠にゆられつつ山路おかしき恋うたききぬ

髪洗ふ女神が茲にわすれたる細櫛とみ^{うみ}湖のゆふづき

以てその一斑を知るに足らんか。

一見以て評すればやさしき歌也。骨太からざれども肉甚だ豊か也。色は春の色にして、気は氳なり。雍容にして寛雅和風にして婉色。希くは此歩調を乱すなくして倦くまでも健にせられんことを。

我らは互に手習草紙の時代に属す。彼此の言、今に於て氏らの価値を定むるものに非ず。この二歌集〔注、『夏廬』と『夏姫』〕のため乱批妄評はあらんとも氏ら願くは左拘右泥せずして慕進せられんことを、中心希望に堪へざる也。妄評。

松原至文の『夏姫』評は、露風の短歌に晶子や柴舟の影響の歴然と認められるものもあるが、又、よく彫琢を凝らして抒情性ゆたかな自分の歌をも作り成しているとしている。至文も薫雨と同様に露風の短歌に注目しているのである。

薫雨・至文とも『夏姫』の詩に触れるところ少ないが、「自嘲」には薄田泣菫の『ゆく春』所収詩篇「悪縁」「遣愁」等の影響が、「森の朝」には島崎藤村の『若菜集』所収詩篇「森林の逍遙」等の影響が指摘できるのであって、これら先行詩篇との影響関係については、稿を改めて述べることにする。

(昭和45年5月28日稿)

〔後記〕

本稿を草するに当たり、内海繁氏が、ご架蔵諸雑誌の閲覧と共に、そのご編纂になるご尊父竜野市名誉市民故内海信之氏宛書簡集拝見の機会をお与え下さって、特にその一部の転載を許可されたことに対して、心から感謝の意を表する次第である。

注

- (1) 「吉田と言ふ歴史の教師」とは吉田益治のことである。和気閑谷高等学校保管の吉田益治の履歴書によれば、岡山県邑久郡笠加村大字下笠加 304 番地（現在の邑久郡邑久町）の人で、明治 8 年 9 月 2 日生まれ。明治 32 年 3 月、兵庫県師範学校を卒業して、同年 4 月、兵庫県養父郡広谷尋常高等小学校訓導となり、翌 33 年 10 月、神戸市雲中尋常高等小学校に転任、35 年 9 月に東京高等師範学校に入学、38 年 3 月、同校地理歴史専修科を卒業して、4 月に閑谷齋に赴任し、40 年 7 月まで同校に勤務した。藤原幾太氏のご教示による。
- (2) 詩歌集『夏姫』の発行は明治 38 年 7 月 15 日。
- (3) 藤原幾太氏のご教示による。
- (4) 脇坂裕之進氏談（昭和 41 年 8 月 28 日、神戸市鳥海菊弥氏邸にて）
- (5) 三木なか氏談（昭和 41 年 10 月 31 日、三鷹市三木邸にて）
- (6) 「三木露風研究(1)竜野時代」(奈良教育大学紀要第 17 巻第 1 号所収、昭和 44 年 2 月発行)で、露風と芳水の親交が、明治 36 年 3 月 15 日発行の『言文一致』誌上の露風の一文「横臥放談」によって、露風の高等小学校時代から始まっていると述べたことは、その後調査の結果、誤りであることが判明したので訂正したい。芳水の明治 37 年 4 月 8 日付け内海信之宛はがきの一節に「三木露風君と何れの人なるや御存じならばお知らせ下され度し」とあるので、昨昭和 44 年 8 月 23 日、芳水翁来寧の節、桃山荘（奈良市あやめ池町）にお訪ねして、このことについてお伺いしたところ、「露風が竜野にいたころにその家を訪ねたことは一度もなく、露風と識り合ったのは彼が閑谷齋に転校してからである」と言われた。したがって「横臥放談」に現れる「芳水」は実在の有本芳水ではなく、虚構である。
- (7) 中島輝氏談（昭和 42 年 1 月 8 日及び同年 7 月 23 日、閑谷の同氏邸にて）。因みに、中島輝氏は父幸平、母小津代の次男として明治 23 年に生まれたが、兄正直が閑谷齋・岡山医専を卒業して医師となり、岡山市内で開業したので、兄に代って家督を相続し、ずっと閑谷に留って農業の傍ら果樹園も経営し、又、永年民生委員・児童委員として社会福祉に尽された。昭和 42 年 10 月 27 日、45 年の長きにわたり社会福祉に尽力したことで、時の厚生大臣坊秀夫氏より特別に表彰を受けられた。
- (8) 『暁星』の事実上の編集者は小阪眉水であった。内海信之氏のご教示による。
- (9) 脇坂裕之進氏談（昭和 41 年 8 月 28 日、神戸市鳥海菊弥氏邸にて）
- (10) 『低唱』については、安部宙之介氏が昭和 41 年 8 月 2 日「朝日新聞」紙上に紹介し、『詩帖』第 13 号（昭和 41 年 12 月）及び同氏著『続・三木露風研究』（木犀書房、昭和 44 年 5 月 5 日刊）にその全文が翻刻された。
- (11) 高浜天我氏談（昭和 41 年 10 月 29 日、東京都文京区の同氏邸にて）
- (12) 『白虹』総目録（『続・三木露風研究』所収）
- (13) 脇坂裕之進氏談（昭和 41 年 8 月 28 日、神戸市鳥海菊弥氏邸にて）。なお、『夏姫』所収詩篇「自嘲」には、神戸要次郎先生に叱られた当時の露風の心情が反映している。「自嘲」の第 1 節と第 5 節とを掲げる。

何の疎狂 ^{しほごだ} ぞ詩の反古抱いて	ゆふべの市にひきぐを真似ぶ	
朋友諫めて先生怒る ^{せんしやう}	あゝあゝ斯くても尙悔ひざるか	(第 1 節)

夕の市 ^{いち} を疲れて帰る	おごり 驕慢の血汐今冷え行くに	
瘠せたる頬に愁ひをまして	暗涙漫ろに催ほし来る	(第 5 節)

- (14) 『閑谷読本』は岡山県立閑谷中学校生徒の課外講読に供せんがために編纂されたもので、編集兼発行者は閑谷中学校国語漢文歴史科であって、前篇の漢詩文は白木豊教諭、後篇の国文和歌等は谷本慶一教諭、全篇にわたっての歴史的事実の探究と、付録の閑谷中学校史年表は藤原幾太教諭が担当している。
- (15) 如来寺住職松山賢光師談(昭和42年6月23日、竜野市藤井十郎氏邸にて)なお、露風の短篇小説「種谷先生の死」(『秀才文壇』第9巻第27号、明治42年12月15日)は、神戸要次郎先生の死を素材として用いているが、主人公種谷要一郎先生とその独り娘千枝子との関係には、三木節次郎と露風との関係の投影があると思われる。
- (16) 太田茂代子との恋愛については、拙稿『「ふるさとの」成立考——そのモデルをめぐって』(安部宙之介著『続・三木露風研究』所収)に詳述した。
- (17) 安部宙之介氏著『三木露風研究』(木犀書房、昭和39年9月1日刊)に引用されている。
- (18) 『三木露風研究』による。

〔付記〕

閑谷費で三木露風と同級生であった万波憲治氏(旧姓戸根、明治23年1月生)の、三木・脇坂両氏について回想談の要点を、閑谷費出身の三好允太氏が筆記して送って下さったので、ここに抄出する。少年詩人露風の面目躍如たるものがあると思う。

「私と三木氏とは同級であり、ともに寮生であった。同氏を中心とする新体詩研究グループの一人でもあり、意気投合の間柄であった。……三木氏の白面で鼻筋のよくなった顔、すんなりとした身体で才子らしい貴公子型であるのと、脇坂氏の顔に大きなアザがあって背が低く、肥満体で落ちついた重厚な柔道マン型であるのとは対照的であった。三木氏は脇坂氏より一級上であったが脇坂氏を親切にリードすると共にある程度の敬意を表していたようで、時々雑談中に「若様」ということがあった。これは郷里の龍野では町の人々もこのように呼んでいたためであろう。かねてから両人が龍野の家に遊びに来いというていたので、明治38年頃だったと思うが、友人二三人とともに脇坂氏の案内で行った。竜野駅から相当の道程を徒歩で脇坂邸に着いたところ、門番らしい人が大声で、「若様のお帰り」といったので、数人が玄関の式台のところで出迎えたのに私共は面喰った。丁寧な取り扱いに野人は窮屈がり、脇坂氏が「是非泊れ」というのを辞して、近くの小高いところにある三木氏の家に行ったが、同氏が不在のためそこを出て、町の宿屋に泊ったものだった。閑谷費では長い伝統を守り、閑谷精神の発揚ということで漢詩漢文に力を注ぎ、生徒も暇があれば詩吟や剣舞をやっていたが、三木氏が新体詩という新しい風を入れたので、生徒の中にもこれについて研究し論議する者が多く出た。私もその一員としてある程度研究した。……同氏の文学、新体詩に関する知識は他の生徒に比して遙か上にあつたので自信もあり、これについての自説の主張には強硬であったので、よく討論が行われたものである。ある時同氏より二級くらい上で秀才として知られた関盛雪(閑谷より早稲田大学を卒業して朝日新聞社?に入り、記者として名を成した人)と論議し、長時間にわたり戦ったが、三木氏の上級生に対しても一歩も譲らず、整然とした理論を聴いていた私たちは感心して、その才能を高く評価したものであった。」

A RESEARCH ON ROFU MIKI PT. II THE SHIZUTANI PERIOD

Chojiro Iemori

Department of Japanese Literature, Nara University of Education, Nara, Japan

He changed school on Nov. 4, 1904, when he was in the middle course of the second year grade of the Tatsuno middle-school. The private middle-school "Shizutani-ko" was situated at Shizutani, Bizen-cho, Wake District, Okayama Prefecture.

At first he stayed in the school dormitory, and then he rented a room from a farmer, and his study was a small villa in a pear orchard called "Fugen-en". In these Fugen-en days he behaved at the disposal of his free and unrestrained disposition, and we may admit that his activity for productive work was rapidly increased.

He was a coterie of the "Hakko" in Okayama, the "Gyosei" in Tsuyama, and "Mikashiho" in Himeji and wrote "Tanka" and poems for these journals.

He also contributed "Tanka" to the "Bunko" and the "Shirayuri" in Tokyo.

"Haiku", "Tanka" and poetry of his own were collected in a pamphlet named "Teisho", written with writing brush and it was deposited with his intimate friend, Yunoshin Wakizaka.

Rofu went up to Tokyo late in August of 1905, after withdrawing from Shizutani-ko on July 1. In memorial of Shizutani-ko he published a book, "Natsu-hime", dated July 15, 1905, which contained 113 pieces of Tanka and 10 poems. His chief interest in those days seemed to lie rather in Tanka than in poems.

This treatise is concerned with his Shizutani-period, from his removal into the school to his withdrawal, and with his life and literary, i. e. creative achievement.